（質問者B） いや、ってことは、霊が亡くなった場合でも、他に転生することはないってことですか。霊が亡くなったっていうか、死んだ場合…。

（尊師） 違う違う。霊が亡くなった場合、霊の世界へ転生するんだよ。で、霊の世界からまた、その場合、だいたい動物か、地獄か、人間界へ転生するんです。そういう世界であると考えたらいいよ。

（質問者B） あ、霊の世界があるという…。

（尊師） 霊の世界があると。で、その霊の世界も無常であるから、転生するんだと言ってるんだよ。

◉在家信徒拡大もコツコツと

（質問者C） キリスト教を信じる人というのは、例えば教会の中に入って修行する人たちと、それともう一つ、日曜ごとに教会に通って教えを聴いて、それが生活の中に入ってしまっている人とだいたい分けられると思うんですけれども、オウム真理教の場合、そうやって中に入ってしまって修行している方々っていうのは、こういうふうにいらっしゃるっていうのはわかるんですけれども、なんか敷居が高いと感じられるゆえに、一般の人っていうか、日曜ごとに教会に行くって感じの信者とか、そういうふうな姿があんまし見えてこないので…。

（尊師） たくさんいます。結論からいうと、たくさんいます。出家は一部です。在家はそれよりもたくさんいます。

（質問者C） あ、いるんですか。

（尊師） います。

（質問者C） そういうのを広げる活動とか、そういうのはするんで…。

（尊師） コツコツとやっています（笑）。

（質問者C） あ、どうも。

（尊師） はい。

「麻原彰晃の世界」PART11 京都大学（91年11月24日）より

◉オウム真理教は性善説か性悪説か

（質問者A） オウム真理教の教義は、いわゆる性善説、性悪説というと、性悪説的な立場を採っておられるんですか。

（尊師） いや、性善でも性悪でもない。つまり、その人が前生において善行をなすならば、それは当然性善になるだろうし、前世において悪業をなすならば、当然それは性悪になるだろうし、前世において善行も悪業もなさないならば、それは性善でも性悪でもないということだよね。つまり、固定的にものを見るのではなく、その人が前に何をなしたかで決まるということです。

◉尊師が説く神の定義

（質問者A） それで、いわゆる、尊師が説かれる神というのを定義していただきたいんです。神とは何でしょうか。

（尊師） 神というのはいろんな神が存在する。ただ、まず、そうだね、神についての説明をするとするならば、かなり時間がかかるんだよ。というのは、例えば十七形状界にそれぞれ神は存在しているし、この愛欲の世界にも七つの神が存在しているし。まあ要するに、神というのは人間より優れた生命体と。当然、その中には創造主も含まれると考えてください。

（質問者A） 創造主とは、別なわけですか。別な神も存在するわけですか。

（尊師） うん。つまり創造主というのはね、形状界の神聖世界の大神聖天を創造主といっているんです。これは、インド・ヨーロッパ語族に伝わる宗教の創造主はすべてその神を指します。これは、キリスト教もまあ実際インド・ヨーロッパ語族的な影響があるわけだけど、例えばヒンドゥー教でいうところのブラフマン、ね、これは創造主っていう意味だけど、このブラフマンと、それから例えばキリスト教でいうヤハウェっていうのは全く同じ定義として経典には書かれています。ですから、それはわたしたちが到達できる範囲の一部であるということもまた間違いない、これは。

◉世界救済のヴィジョン

（質問者A） 世界救済のヴィジョンをぜひ語っていただきたいと思います。

（尊師） これだもんね。

（質問者A） つまり、万民救済なのか、一部の選ばれた者だけが救われるのか。

（尊師） いや、それはね、二つの考え方があって、一つは万民救済といえば万民救済であると。あるいは、一部を救済するといえば一部を救済するものであると。どういうことかというと、多くの法をできるだけ振りまくと、一般に。これはまずOKだね。

で、その法を聴いて実践する人、それは当然救済されることになるわけだから、その聴く人が万民であれば万民救済であると。しかし、その法がそこに存在するのにそれを実践しないで、例えばここに薬と毒とあったとして、その毒を取って毒を飲む人は、それはしょうがないじゃないかということだよね。わたしたちは当然、薬を飲みなさいという宣伝はします。

だから、そのために、まあ例えば書籍の値段を、ね、破格の値段に引き下げたりとか、ビデオの値段を引き下げた

りとかいう工夫をしながら、できるだけ多くの人に、入信する入信しないはともかくとして、まずオウム真理教の教えを広める必要があるということで実践しているわけです。答えになってるかな。

そしてその延長上に、まあ最終的な救済が存在するわけだけども、まあ開かれた法であることは間違いないと。で、開かれた法イコール万民救済だというならば、それは万民救済であるということだよね。

◉いろんな解脱の段階

（質問者B）尊師は、日本でただ一人の最終解脱者であるということらしいんですけれども、わたしには、解脱というのは輪廻の苦しみ、その輪廻の輪の鎖から解き離たれることであるというふうに、ま、解脱は一つであるというふうにこれまで思ってきたわけなんですけれども、最終解脱とおっしゃるからには、解脱といってもいろんな段階があって、その最終段階であるということだと思うんですけれども、ではそれはいったいどういう境地なんでしょうか。

（尊師）境地ということを説く前に、まず解脱には、そうだね、全部で九段階の解脱があるとか、八段階の解脱があるとかいうふうに、一般的にいわれています。

で、この九段階の解脱、八段階の解脱とは、これはどういうことなのかというと、一つ一つの世界から離脱することイコール解脱なんだね。例えば、わたしたちがこの粗雑な世界から離脱することイコール解脱であるし、あるいは先程述べたアストラル、つまり微細な世界から離脱することイコール解脱であり、あるいは空間から離脱することイコール解脱であり、あるいは識別から離脱することイコール解脱であり、あるいは無の境地から離脱することイコール解脱であり、あるいは認知から離脱することイコール解脱であると。

そして、最終の解脱というのは認知経験滅尽といわれている状態であると。認知経験滅尽とは何かというと、過去における経験の因を受けないということなんだよ。つまり、例えばある行為をなしたと。例えば、飲み物があって、その飲み物が大変おいしかったと。おいしいから、次にまたその飲み物を飲みたいという心の働きが生じてこないと。一回一回新鮮な状態で動きが生じるということなんだよね。

（質問者B）あ、そうしますと、例えば、今の現代の日本の人々がまあオウム真理教に入って解脱を求めるとするならば、どの段階まで行けるんでしょう。

（尊師）いや、それはその人の機根によって、最終の段階まで行ける人もたくさんいると思いますよ。

◉仏陀とイエス・キリストの教えの違い

（質問者B）で、イエス・キリストであるとか、あとゴータマ・シッダールタであるとか、そういった方々も最終段階まで行かれたということですか。

（尊師）少なくとも、ゴータマ・シッダールタが最後まで行かれたことは間違いない。キリストというのはね、イエス・キリストというのは、そういう解脱を目的としたんではなく、微細な世界の神の息子になることを目的として法を説いてるんです。

つまり、それは『タターガタ・アビダンマ』、多分、今日配られると思いますけども、その『タターガタ・アビダンマ』の中の、形状界の神になることを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

特に、この宇宙が存在しているときには神聖世界へ生じ、宇宙が存在していないときは光音天の世界へ生まれ変わるということを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

ところが、ゴータマ・シッダールタ、つまり仏陀の教えというのはそうではなくて、その形状界を超えて、空間、識別、それから無、そして認知ね、これを完全に超越し、最終的には経験まで超越したところに自分自身を置こうと。つまり、自分自身を構成しているものすべてをゼロにすることを目的として説いたのがゴータマ・シッダールタの教えなんです。

だから、そういう意味でいったら、ゴータマ・シッダールタの、仏陀の概念の中にキリスト教の概念は含まれるというふうにとらえていいと思います。

◉尊師の来世

（質問者B）少し失礼な質問なんですけれども、尊師もこの世に肉体がある以上は、いつかはその肉体も滅ぶときが来ると思うんですけれども、そうするとその後、その尊師の魂――といっていいのかわかりませんけれども――はどうなるんでしょうか。

（尊師）経典からいくならば、俗にいうところの創造主の世界へ行くことになっているけども、しかしわたしとしては、まあ人間の世界へ行くのか、あるいは第一天界へ行くのか――つまり、そうだね、龍とか、あるいはガンダッバとか、まあいろいろあるわけだけど――そういう世界に行くのか、まだ決めてないと。

（質問者B）あ、いや、尊師がもう決められるわけですか。

（尊師）もちろん、わたしが決めます。

（質問者B）は、はい。

（尊師）というか、最終の解脱というのは、あなたが決められる権利があるんです。というのはなぜかというと、つまり、例えばね、そうだね、ここに一から百までのカード

を持ってる人と、一しか持ってない人との違いなんだよ。その一から百までのどのカードを選ぶかというのは、持ってれば選ぶことができるよね。持ってなければ選ぶことはできないよね。ところが、一般の人はそのカードを一つしか持ってないんだ。つまり、今生で人間としての完全に業が切れた、その業の切れた段階で、それまで経験してきたものが次の生を形成するんです。

（質問者B）ありがとうございました。

◉分析し、合成するのはだれか

（質問者C）真理というものは、シンセシスとかアナリシスを経て得られるものだということですが、分析、それから合成するというのは、だれがいったい分析し、だれがいったい合成いたすんでしょうか。

（尊師）あ、すごく難しい質問だね、それは。まあ結論からいうならば、そうだね、真我のオーダーということになるわけだけど、その真我というのは最終地点で純粋化されるわけだけども、ま、その真我のオーダーというふうに考えていいんじゃないかと思うね。

（質問者C）その真我のオーダーっていうのは、人間だれしも普遍に持っているものなんですか。それとも…。

（尊師）いや、みんな持っているんです。

（質問者C）みんな持っている？

（尊師）はい。昔から、永遠の昔から持ってるものなんです。

（質問者C）尊師の見解の、人間は人生、生きていると苦というものを味わわなければならないということは、それと同じく、主観的な考えにすぎないと思うんですけれどもどうでしょうか。

（尊師）うん？　主観的な考えにすぎないってどういうことかな。

（質問者C）つまり、いろいろな考え方がありますから、真理とおっしゃいましてもいろいろな到達点が考えられるんではないかと思うんですけれども。

（尊師）うん、だからそれを突き詰めていけば一つになっちゃうんだよ。例えば、人間は死ぬものであると。これはどうかな。

（質問者C）はい、それは正しいです。

（尊師）生まれて死ぬものである。これはどうだ。

（質問者C）はい、そのとおりです。

（尊師）正しいよね。じゃ、生まれて死ぬ中間状態で老いるものである。これはどうかな。

（質問者C）あ、それも正しいです。

（尊師）つまり、そういうだれが見ても正しいことを突っ込んで考えて、それが果たして苦なのか楽なのか、つまり幸福に導くものなのか不幸に導くものなのかということを行なうこと、これが分析なんだよ。だから到達点は一緒なんです。

（質問者C）ああ、わかりました。

◉高い生命体が生きていると判断する論拠

（質問者C）それではもう一つ、質問させていただきます。高い生命体というのは、どういうことでそれが生命かと、つまり生きていると判断しているのか、その論拠を教えていただきたいんですけれども。

（尊師）これは難しいところで、経験だね、結論からいうならば。

（質問者C）あ、あなたの経験ですか。

（尊師）わたしの経験だけではなく、ま、それはキリストも経験していることだし、仏陀も経験していることだし、それは経験だよ。

（質問者C）経験からそうお感じになる？

（尊師）感じるのじゃなくて、そういう経典がたくさんあって、そして実際それを経験してると。それからもう一つ別の言い方をするならば、その生命体が生きてないとしようじゃないか。じゃ、わたしたちは生きてるんだろうかという、次に論議が出てくるわけだよ。

（質問者C）つまり、わたしはですね、科学っていうか、生物を勉強してますが、今のところ、それで考えますと、つまり生きてるという状態は、物質の秩序を保つ方向に動いているという状態を生きていると考えていますが、高い生命体っていうのが精神世界のものであり、そういう秩序に向かう方向の働きっていうものがどういうものなのか想像できないんですが、そこのところをおっしゃっていただきたいんです。

（尊師）例えばね、ある神がいたとしましょう。で、その神にわたしが会ったと。そのときに、わたしだけじゃなくて他の人もそこで会ってたとしましょう。で、その神との会話をわたしが記憶していて、その人も記憶してたとしましょう。ね。じゃ、この経験は正しいか正しくないかと。これはどうかな。

（質問者C）それを判断できるのは、その会った人っていうか、そうおっしゃられた会った人たちだけだと思うんですが、我々には判断不可能だと思うんですけれども。

（尊師）いや、だからそれが、そこでのまやかしがないとするならばの話をしてるんだ、わたしは。

これは何を言いたいかというと、例えばあなたがね、BさんとCさんと会ったとしましょう。で、ところがBさんとCさんが会ってないのに会ったと言って、あなたも会ったと言ったならば、これは正しくないけども会ったことに

なるよね。どうかな、それは。
(質問者C) それは、でも、真理とおっしゃられるに不十分…。
(尊師) いや、不十分じゃなくて会ってないことになるねと言ってるんだ、わたしは。それはどうですかと言ってるんだ。
(質問者C) あ、はい。
(尊師) だよね。で、それと同じ次元で、嘘をつくとするならば、それはそうかもしれないけど、この人間の世界ですら、そういう意味でいったらわたしたちはマーヤ、つまり幻影だと思ってるわけだよ。つまり、そういう世界と同じレベルで見るならば、そこで生じる現象はすべて同じであると。
(質問者C) あ、わかりました。どうもありがとうございました。
(尊師) はい。

◉形からものを見る見方を離れて

(質問者D) 神ですけれども、神が最終的な何ものなわけですか。
(尊師) いや、だから神を超越して、神ですら永遠じゃないんだと。例えば、最も長い神といわれているものは、六万カルパ、つまりこの宇宙が六万回創造され破壊される間、生きることができるといわれてるわけだけど、それでも六万回後にはまた生まれ変わるわけであって…。
(質問者D) そういうふうにいわれている神は、生命体としてある意味で形を持つんですか。
(尊師) 形を持つものと持たないものがある。つまり、形を持たないものを非形状の神といい、形を持つものを形状の神といいます。
(質問者D) 我々はもう形からものを見る見方にすごいひたりきってますから、そういう言い方をすると、何かすごい実体的な何かを想像してわからないだの何だのこう考えがちですよね、神といった場合。
(尊師) でもね、例えば、そうだね、光ファイバーの中を光が通って情報伝えてるね。この光を、例えば光として認識することはできるけども、形状として認識することはできないよね。どうかな、それは。
(質問者D) はあはあ。ええ。
(尊師) しかし、わたしたちは、それを通常の生活の中で使ってるわけでしょ。
(質問者D) あ、そうですね。どうもありがとうございました。

◉神様が試練を与えたのはなぜか

(質問者E) ちょっと一つ教えていただきたいんですけども、人間っていうのは生まれてきて修行して、それが真理に近づくと、いいところというか、より優れた生命体になれて、で、もし真理から外れた生活とかをして死ぬと、まあ地獄っていうかそういうところに行ってしまうっていうことなんですが、まあやっぱり今の世の中っていうのは真理どおりに生きるのは非常に難しい世の中だと思うんですが、神様が僕たちにそういう試練を与えたのはなぜかっていうのをお伺いしたいんですけども。より高い生命体に上がるっていうのが、どういうふうな意義があるのかっていうことをお伺いしたいんですけども。
(尊師) それを話す場合、宇宙の創造から話さなければならないわけだけど、もともとわたしたちは純粋な真我と、そして三グナと呼ばれている、これは動性、善性、暗性という三つのエネルギーが存在していたと。そして、その動性、善性、暗性といわれる三つのエネルギーと真我が干渉し合うことによってこの宇宙が生じたという考え方があるわけだね。
　で、この三つのエネルギーと、それから真我のぶつかり合い、これを生じない真我も存在していると。で、そのエネルギーのぶつかり合いによっていろんな経験が始まるわけだけど、その経験こそが本来真我が持っている、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの状態を破壊するものであると。で、だとするならば、そういう三つのエネルギーの干渉がどのような形で起きたにしろ、それに対して全く耐えることのできる真我の状態にしていくことこそが最高の状態であるということだよね。
　そうすると、例えばわたしたちが、じゃなぜその干渉によって巻き込まれるのかと。例えばだよ、例を挙げよう。ここに性欲の大変強い男性がいたとして、その男性は性欲を満足させるためにどのような女性でもいいからつきあいたいと。で、まあどのような女性でもいいからまあ寄っていってつきあうことになったと。次に、あまり性欲は強くないけど性欲を持っている男性がいたとした場合、まあその人は好みの女性が近づいてきたら、当然つきあうだろうと。次に、全く性欲がない男性がいたとした場合、いかなる女性が寄ってきてもおつきあいしないだろうと。
　これと同じように、大いなる経験をさせることによって、そのいっさいのエネルギーの干渉を完全に遮断してしまうと。これがもともとの意味合いなんだよ。理解できるかな。
(質問者E) まあ、少し理解できました。
(尊師) 今の理解できないというのは、どこが理解できないかな。
(質問者E) いや、だからそのより高いところに上がれるというのはわかったんですけども…。

（尊師）より高いではなくて、その真我の独存位というのは普遍なんです。つまり、より高くもなければ、低くもなければ、要するにその中に絶対的な自由・幸福・歓喜が内在されていると。で、その状態は壊れないということなんだよ。

（質問者E）わかりました。で、もう一つお伺いしたいんですが、そしたらまあわたしらが呼んでるところの、その究極の神様というのも、昔は人間だったこととかはあるんでしょうか。

（尊師）はい、あります。

（質問者E）わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

●人間が行くことのできる世界

（質問者F）尊師はよく欲六界ということをおっしゃられますけども、現在我々が相互作用できるのは人間界と動物界だけということでよろしいですか。

（尊師）いや、餓鬼界にも行けます。

（質問者F）というか、我々は動物だったら、あ、犬がいるなって感じで認識できますけども…。

（尊師）餓鬼界というのはね、低位霊域というふうに正確にいうと訳することができてて、例えばあなたがめちゃめちゃに疲れたと。そのとき金縛りに遭って行く世界、これが低位霊域です。ですから、わたしたちはこの人間界、それから低位霊域、動物の世界、三つに行くことはできます。

（質問者F）ということは、天界とかそれから地獄界とかっていうものは、現象することは絶対ないわけで、我々がいわゆる一般に認識と呼んでおるような状況で現象することは…。

（尊師）難しいね。それは難しいね、それはね。

（質問者F）難しいですか。はあ。下位ということであれば、真我の集合体ってこと考えてると認識してよろしいわけですか。動物界とか、それから天界とかっていうのは。

（尊師）どういう形で生じるか、まあ世界の様子というふうに考えてほしいんだけど、例えば地獄の場合は激苦地獄というふうに表現されてるし、動物の場合は動物の発生というふうに表現されてるし、餓鬼の場合は低級霊域というふうに表現されてるし、それから人間の場合は人間の世界というふうに表現されてるし、それからまあ一つ上の世界は意識堕落天というふうに表現されてるし、それからもう一つの上は戯れ堕落天というふうに表現されていますと。これが愛欲の…。

（質問者F）ええ、それは知ってるつもりなんですけれども。

●生命の寿命の長さは普遍

（質問者F）じゃあ、ちょっと変わった質問しますけれども、人間界の寿命というものは、麻原さんの本にも書かれてますけども、地獄界とかの場合も寿命とかいうのがあるわけですか。何年とかいうふうにいえるわけでしょうか。

（尊師）それは、その人の苦しみを生じさせるカルマが切れるまでですから、まあ一応表現としては何カルパとか何十カルパとかいう表現はあります。

（質問者F）それは寿命みたいな形でとらえていいんですか。一般的に、確かにカルマというものはあるんだと思いますけども、人間界だったらば、現在だったら例えば八十年とか、そういうふうにだいたい決まってると思うんですよ。カルマの大小はあるのかもしれませんけども。

（尊師）いや、それは違うよね。例えば、インドは平均寿命は五十歳以下だし…。

（質問者F）ええ、それはそうですけど、例えば一億年生きる人間というのはきっといないと思うんですよ、現在の寿命で。例えば、まあだいたい何年というオーダーではかられるようなもので、あんまりこうかけ離れた数字って出てこないと思うんですよ。三千年生きるとか、ちょっとこれはオーダー違いますね。そういう形で出てくることはないと思うんですけれども。

（尊師）ただ、『聖書』とか仏典にはそれが載ってるし、そしてもう一つは、人間の寿命の最長は何歳まで生きられるんだという場合、例えば今でも百五十とか二百とか生きる人と、それから逆にまあ五歳十歳で死んでいく人と考えるならば、少なくとも二十倍、四十倍のカテゴリーで生きることはできると。そうすると、最長の二百から、それからまあ二十倍、あるいは四十倍とするならば、四千歳、八千歳という寿命があっても当然であると。そういう形の、どちらかというと、そうだね、段階的発想でいくならば、生命の寿命の長さというのは普遍といっておかしくないと思うんだ。

例えば五歳しか生きられない人は、二百歳まで生きたいと考えるだろう、絶対。どうですか、それは。

（質問者F）え？

（尊師）例えば五歳で死が決まってる人がいたとしてね、長生きしたいと——例えば、二百歳まで長生きする人がいたとして——その人はやはり、ものすごい長命、想像もつかないような長命に見えるよね、当然。

（質問者F）ああ、はい。

（尊師）同じことが、例えばいえると思うんだよね。だから二百歳、それから、二百歳を起点とするならばまあ二十倍、四十倍のカテゴリーが成立していいとするならば、四

千歳、八千歳というのは当然いけるわけでしょ。だから、そういう生命体が存在して当然であるとわたしは考えるけど。

（質問者F）ああ、その生命、存在するってことはまあ存在してもいいと思うんですけれども、知らないですから判断は保留ということで。

◉ニュートンの法則が成立しない世界がある？

（質問者F）それでは、例えば我々の現実世界において、例えばニュートンの法則とか、それからまあ何でもいいんですけれども、いわゆる自然法則というのが成り立ってますけれども、これはどうして成り立ってるわけですか。これは管理存在とかあるわけですか、やっぱり。

（尊師）いや、そうではなくて、エネルギーの流れによって成り立ってるんだよ。例えば、経験したらわかるわけだけど――まあ、ここらへんはほんと経験の世界になるけどね――例えば意識頭落天というのは、だいたい地上から、そうだね、五〇センチとか一メーターとか浮いた形で動いています。これは例えば、ギリシャ神話なんかの神も地に足が着かないという話があるわけだけど、それと同じです。ということは、その世界においてはニュートンの法則は成立しないと。

ところが、この人間の世界は、多くの魂、ほとんどの魂が下へ落ちるわけであって、よってその落ちるという法則が中心に働いているると。これが仏教的な考え方です。だから、もし上流、つまり上に向かう魂が多くなれば、その分だけ、当然エネルギーの流れの変化は生じるはずです。

（質問者F）で法則は、例えば、百年前も成り立ち、今も成り立ってるっていう、そういうことがあると思うんですけども…。

（尊師）だから、それは短いよね。

（質問者F）ええ、それは短いですけれども。

（尊師）うん、短いよね、要するに。もっと長い…。

（質問者F）こういう法則自体を管理してるような存在というのはないんですか。

（尊師）法則自体…、まあそれは夜摩天――支配流転双生児天という双子の神様、日本では閻魔大王といわれてるわけだけど――がいらっしゃるわけだけど、その魂が管理してると一応いわれてるけども、わたしはそれより心の働きであると考えてます。

◉同じ行為でも基準によって

（質問者F）もう一つだけよろしいですか。例えば、盗みをしてはいけないとかいうことあると思うんですけども、これが、例えば同一の現象を行なったとしても、ある社会の基準というのがあって、おんなじ行為でも盗みと判定されるかされないかというのは変わってくると思うんです。

（尊師）それは素晴らしい質問だね。

（質問者F）これは変わってくると思うんです。

（尊師）なぜ素晴らしい質問といってるかというと、ここは一つのポイントになるわけだけど、意識が低位に至れば至るほど、その条件というものは甘くなります。しかし、その分、裁きも大きいと。例えば、例を挙げるならば、動物の世界でお互いがかみ殺し合うと。この殺生は認められています。しかし、彼らはその分苦しみも大きいと。同じように、盗みもそうであると。

（質問者F）あ、どうもすいません。どうも長いことありがとうございました。

◉真理の奥の深さ

（質問者G）次の世代で上位になりたいとか、解脱をしたいとか、そういうようないろんな人間の欲、感情はどういうふうに構成されているのでしょうか。

（尊師）これは、仏教にも欲知足というのがありまして、つまり欲の船に乗って欲を消滅するという教えがあります。これはどういうことかというと、例えばね、アメリカに行きたいと考えている人がいたとして、で、例えば飛行機を使ってアメリカまで飛んだと。そして、アメリカに着いてしまったら、アメリカに行きたいとは考えないだろうと。どうかな、これは。

つまり、解脱したいと考えてる人がいて解脱してしまったら、もう解脱したいと考えないと。ところが、解脱に至るためにはその欲が必要なんだということだね。

（質問者G）いや、アメリカに関していうんだったなら、なぜアメリカに行きたいのかという疑問に対する分析があると思うんです。だから、人間が感じるときの、来世上位に行きたいとかっていうときに、あのう…。

（尊師）いや、来世はみんな持ってるんだよ。

（質問者G）いや、来世に行ったときに上位に行きたいと、そういう欲に対する空しさ、やましさを感じるんですけど、それに関しても分析を…。

（尊師）いや、だってだよ、その欲に対してやましさを感じようが感じまいが、例えばだよ、ここにフライパンがあって、そこにあなたが乗っけられてて火であぶられてるとしようじゃないか。で、いや、わたしは前生においてこういう世界に、ね、行っても構わないと。つまり、あのときわたしは上位の世界へ行くことはやましいと考えたからこういう世界へ行ったんだと言ったとして成り立つと思うか、それが。

（質問者G）いや、僕はそんなのが、まだあるかないかわ

かんない感じで、僕は現実の世界に立脚をした生き方をしたいと…。

（尊師）うん。だから、現実の世界を分析することによってこの現実の世界の価値を正確にとらえる、そしてそれを超えるということがまず第一段階にあるわけです。わかるかな、言ってることは。例えばだよ、あなたの言うその現実を十分に消化したいと、あるいは現実を充実した形で生きたいと考える。これそのものは悪いことではないよ。ただそこにおいて問題になってくるのは、その現実の意義、つまり来世の意義を考える前に現実の意義を考えていないではないかと、分析していないではないかと。これはどうかな。

（質問者G）だから、もっと現実に対する分析は、日本の社会に対してどう働いてどういうふうにしていくかという方をもっと完全に変えていった方が、まあ僕は人間に立脚する考え方より重要なのではないかと思うんですが。

（尊師）いや、それは先程も言ったとおり、まず個人から発生して、個人の生とか老いとか、病とか死とかいうものについて考えること、ね、それと同等で、例えば、ま、君の今のその命題というのは、同等であるか、あるいはそれ以下だと思うんだよ。で、なぜ同等であるかそれ以下だといえるかというと、この第一の命題の生・老・病・死というのは、だれもが通過する問題であると。これはどうかな。

（質問者G）それはそうです。

（尊師）しかし、社会の諸現象というのは、ある人は関係があるし、ある人は関係がないよね。例えば、例を挙げるならば、消費税の問題があったとして、消費税は、例えば大金持ちにとっては大した影響がないと。逆に大金持ちにとって、まあ優位に展開したわけだけども、大した影響はないと。しかし貧しい人にとっては影響があると。しかし、これらの貧しい人も大金持ちも最終的には死ぬわけであって、その死について考えた方がより有意義じゃないかと思うわけだけど、どうだそれは。

（質問者G）いや、まあそこは、僕はその死以降についてはあえて考えないというか、あるかないかわかんないような世界に行ったとして、そのための生き方をするよりもという、今のある世界に立脚して生きていった方がと思ってるんで、ちょっとそこは相容れないかなあとか思うんですけど。

（尊師）いや、だからね、例えば、そうだな、ということは、君は死後の世界はあるかないかというのは、もう今生では考えないということだね。

（質問者G）いや、考えてもわからないから、それを考えてもわからない…。

（尊師）いや、だから考えてもわからないじゃなくて、その教えを聞いて実践することによって、経験ができると言ってるんだ。

（質問者G）まあ、それはそれで一回人生使ってしまうことになりますんで（笑）、それをあえてしない…。

（尊師）それは勘違いだよ。なぜ勘違いといえるかというと、例えば、サーリプッタは二週間で悟ったし、マハーモッガラーナは一週間で悟ってます。あるいは、ケーマー比丘尼は九カ月で悟ってます。だから一生は使ってません。

それをだよ、君の、この世の中を変えることは、今まで多くの人が――例えば、まあ例を挙げるならば、そうだね、マルクスが社会主義あるいは共産主義というのをぶち上げて、で、試みたわけだけど、失敗したわけでしょ。

（質問者G）まあそうです。

（尊師）何百年かかっても、結局は、みんながそういう意味で平等というか、本当の意味に幸福になるような社会というのは不可能なんだよね、この人間の世界では。

（質問者G）全員がオウム真理教の信徒になってもですか。

（尊師）いやあ、それは可能性があるかもしれないけど（笑）。いや、それは可能性があるかもしれない。でもまあ、一般的には不可能なわけでしょ。

（質問者G）いやだから、何らかの形で可能性があるというふうに今お見えになったのに、あるかもしれないですし、まあわからないというかね…。

（尊師）ただその場合、この現実の価値観よりより高い価値観を提起しない限り、それぞれが持っている利権とかそういうものは手放さないよね。これはどうかな。

（質問者G）うん、だからまあ、人間はどうしても、こう、ごたごたした存在だとは思いますけど。

（尊師）そうだよね。で、当然、この現実の生活を分析する瞑想というのも存在してるわけです。だから、先程の比喩においては、現実の生活のまあ例というのを挙げてるわけだね。当然、それは瞑想において、しょっちゅうそういう瞑想はします。そして実践します。

例えば、まあ例を挙げるならばだよ、今オウムが実践している、一冊五百五十円で本を出すためにはどうしたらいいかという検討までわたしはやってるわけだ。でしょ。というのは、一般的に出すならば、やっぱり今一冊千円ぐらい出さないと、ねえ、原価割れしちゃうわけだけど、それはどうやって出したらいいんだと。そのためには、例えばこういう機械を導入して、このような形でもっていけば五百五十円で出せるなと。で、それができるというのは、より高度な分析ができるからなんだよね。

だから例えば、例を挙げるならば、今二年間あまり、まあ社会的にオウム真理教というのはかなり強く叩かれたわけだけど、平然として組織は維持できたというのは、まあ

もともとそれだけのものが生じる、つまりオウムはバッシングされるんだということを予言して、その準備をしてたからなんだね。経済的にも、いっさいどこからも借り入れをしないで自力でやっていくということを、もうその叩かれる三年も前から準備をしていたから、平然と生きてこれたわけです。

そういう智慧というのはあるわけだけども、それはあくまでもわたしたちにいわせると低次元の智慧なんだね。ということです。

(質問者G) だいたいわかりました。ありがとうございました。

(尊師) はい。

●犬のウンチも神から見れば……

(質問者H) 教えの方でちょっとお聞きしたいんですけども、そもそも人間と神とはどのように位置づけられるものだとお考えになりますか。

(尊師) いや、それは、要するになしてきた部分の違いであると、過去において。

(質問者H) 確か、幸福の科学の教えでは、ま、それを信じている信じてないは別としまして、確か人間といいますのは、神の創造物というよりはむしろ表現物であると。だから、神のある一面の現われが人間であると。確か、そのような教えをのたまわったと思うんですけれども、尊師としてはどのようにお考えになりますか。

(尊師) 質問していいかな。

(質問者H) はい。

(尊師) 人間のどの要素に、神の具現化された形があると思うか。例えば、犬のウンチを拾うことが、神の具現化した形だと思うか、君は。例えばね、例を挙げるならば、まああのときわたしは発言させてもらえなかったから発言しなかったんだけど。いや、明らかに、ね、これは――ま、こういう話、君たち好きだから、あんまり話したくないんですよ(笑)。いや、事実、例えばインドに行くよね。インドに行って、例えば果物の皮とかを投げた方がいいんだよ。なぜかというと、牛とか、実際に自由に生きてて、そういうものを食として生きてるわけだよね。わかるよね、言ってることは。

つまり、日本のある意味での、人間の感覚から見たカルチャー感覚からいくと、犬のウンチを拾うことは大変素晴らしいことかもしれない。しかし、そうではなくて、例えばもっと大きな視野で見るならばそれは大したことじゃないわけだよ。だから、条件によって違うことを教義の中枢として、例えば、マスメディアを使って報道する、あの報道のあり方にわたしは大変な疑問を持ってるわけだね。

で、犬のウンチを拾うことが神の意思なのかどうかというと、神の意思としては、要するに、犬のウンコであろうと人間のウンコであろうと、本当は自然に返って、それが肥料となって、例えば糞そのものも微生物の栄養分になるわけだから還元してあげてもいいわけだよね。

(質問者H) ありがとうございました。

(尊師) そういう考え方もあるわけですよ。

「麻原彰晃の世界」PART11
信州大学(91年11月1日)より

●人間はなぜ生まれてきたのか

(質問者A) 僕らは毎日こうして生活してるんですけれども、やっぱり一番疑問に思うのが、どうして僕たちは生まれてきて、こうして生活して、最終的には死んでしまうんですけども、こうやってお金稼いだり、勉強したりして、結局、何を目的として暮らしていくのか知りたいんですけど。

(尊師) 大変いい質問だと思うね、それは。まず、人間がなぜ生まれるかというのは、十二の条件生起の法というのがあります。この十二の条件生起の法というのは、まあ君たちは正しくない言葉で、「あいつはわたしに因縁をつけた」とかいうわけだけど、その因縁、これは十二因縁の法とか、十二縁起の法とかいわれている、これは正確に訳すると、十二の条件生起の法という言葉で表わすことができると。

で、その十二の条件生起の法そのものが、わたしたちがこの人間の世界へ生まれてきたプロセスをしっかりと説明していると。よって、その十二の条件生起の法について話をしましょう。

まず、わたしたちが死というものを迎えた直後、わたしたちはまず気絶状態に入ります。この気絶状態に入るというのは、この粗雑な人間の世界をすべてであると考えている意識がそこから解き放されるときに、そのショックによって気絶をするわけです。そして、その気絶状態に入ってその次の段階で、経験の構成を認知するプロセスに入ってくると。

経験の構成を認知するとは何かというと、例えば、その前の生においてロックをたくさん聞いていたとか、あるいはジャズをたくさん聞いていたとか、あるいは科学の本をたくさん読んでいたとか、あるいは実際に科学の研究をしていたとか、あるいは、例えば食べ物で信州そばをたくさん食べていたとか、そういう経験の構成が甦ってきます。

で、経験の構成が甦ってきた段階で、次は識別作用が生じます。識別作用というのは、その経験に基づいてどの世

界へ行こうかという識別作用が生じます。で、そして自分の望む世界はここであるというそういう識別が生じた段階で、次は先程述べたとおり、形状・容姿と心の働きのみが存在する世界へと至ります。この、心の働きと形状・容姿というのは、要するに触れることのできない身体と、そして心の働きが同時に存在している世界へと移行していくわけだね。

　そしてその次の段階で、その心の働きと形状・容姿の六つの器官、これは、目、耳、鼻、口、ね、そして触覚という五つと、それから心の働きの六つが外界と接することにより、というのは、この心の働きと形状・容姿の世界にはたくさんの他の生命体がいますから、外界と接触することにより、そこで感覚が生じてくると。

　そして、感覚が生じるがゆえに、次はもっともっとより強い感覚を得たいと。これは、例えばおいしいものを食べたらよりいっそうおいしいものを食べたいとか、あるいはわたしたちが性的快楽に対して縛られているのと同じように、よりいっそう強い渇愛が生じてきます。つまり、欲求が生じてくるわけだね。

　そして、その欲求が生じてきた段階で、その次の段階で、その欲求なるがゆえにとらわれるようになります。例えば、恋愛においても、あの人でなきゃ駄目だとかこの人でなきゃ駄目だとか、食べ物でも、わたしは例えばカレーが好きなんだけどラーメンは嫌いだとか、このような形のとらわれ、愛著が生じてきます。

　で、実はその愛著が生じた瞬間に、それと同時に、裏側に嫌悪、つまりあの人は嫌いだこの人は嫌いだといったような感情も生起するわけだけど、まあそれはいいとして、その相反する感情が生起した次の段階で、それを具体的にもっともっと経験したいという心の働きが働きます。そして、子宮へと至るわけです。

　子宮へと至った魂は、もう君たちも知ってのとおり、そのまま生存へと至ると。これが、わたしたちがこの世に生まれてきた意味合いです。ですから、この世に生まれてきた意味合いというのは、要するに欲望、煩悩というのがあって、その煩悩によって生まれてきてるんだということになるわけだね。よろしいでしょうか。

◎絶対的価値観と相対的価値観

（質問者B）わたしは、絶対的な価値観というものは存在するのかって聞いたんですけれども、先日、人と話をしていて、三人で話をしてたんですけれども、二人の方の価値観があまりにも違うっていうか、うまく説明できないんですけれども、わたしはほんとにもうどちらが正しいかってことは自分でももちろん判断できなかったんで、こうしてこういうこと聞いたんですけれども、人間が生きていく上で、どういうものに価値を置いて生きていくのが正しいのか、そもそも正しい価値観とか正しくない価値観とかそういうものがあるのか、そういうものがすべてわからなくなってしまったんで、そのへんをちょっとお聞きしたいと思います。

（導師）価値観っていうのは、二つのカテゴリーに分けることができると。その第一の価値観は絶対的な価値観と。第二の価値観は相対的な価値観と。で、この絶対的な価値観と相対的な価値観の違いは、その超越した煩悩の状態との価値観を中継するのか、あるいは煩悩によって目的を追求することによって生じる価値観を採るのかによって違ってくると。

　例えば、第一番目の例は、わたしたちは必ず死にますと。よって、長生きしたいと。あるいは、わたしたちは必ず死ぬから、苦しみの少ない世界へ、幸福の多い世界へと生まれ変わりたいと。あるいは、この人生で生きていて幸福になりたいと。このようなものは、すべて絶対的価値観に属すると。

　では相対的価値観とは何かというと、例えば学校生活を実際送ると。そして、高学歴、そして一流会社といったエリートコースを歩むと。これに価値を見いだしてる人、あるいはそうではなくて、例えば人生というものはもっとゆったりと楽しみながら生きていくことの方がいいんだと考える生き方と。このような例えば価値観というのは、相対的な価値観に属するということがいえると思うんだね。

　で、この相対的価値観というのは、必ずその人が何らかの精神的トライをするならば変化すると。しかし、絶対的価値観というのは、その絶対的価値観の終局である悟り、あるいは解脱をしない限り、その絶対的な価値観における満足を得ることができないと。こういうことがいえると。

　そして、この相対的価値観は、瞬間瞬間、一時的には喜びを満たしてくれると。例えば、この人間の世界はわずか八十年であると。この八十年間の間において相対的価値観は有効であると。しかし、絶対的価値観は、それを超越した長い長い魂の流れにおいて有効であると。ということは、相対的価値観を捨断し、絶対的価値観を採った方がわたしたちにとってはより多くの利益があるといえると。よろしいでしょうか。

◎真理勝者の発するヴァイブレーション

（質問者C）仏陀である釈迦が悟りを開いた後に人々に法を説いたときには、人間の言葉もわからない動物もその教えに聞き入っていたというんですけれど、それについてはいかがでしょうか。

（尊師）それは事実だと思うね。というのは、真理勝者の発するヴァイブレーションというのは大変神聖なものであると。例えば、オウム真理教でわたしが法を説くときも、例えばネズミがね、わたしの体に乗っかってきて体の上で遊んでるという状態もある。

　これは、全くその同じ意味合いで、仏教の修行の中に非害心というのがあるわけだけど、相手を害さない修行、あるいは非暴力・非残酷という修行があるわけだけど、そのような形で、動物界というものは完全に動物連鎖によって恐怖を覚えてるわけだけど、サキャ神賢の場合、その恐怖を全く与えない心の働きがあられたので、動物たちも神聖な気持ちになれたということだよね。

　それからもう一つは、これは、そうだね、物理の話になるわけだけど、人間が聞いている可聴範囲の声ではなく、例えば低音範囲とか高音範囲には別の成分があって、その別の成分は、例えば動物とかそういうものに対しても一種のヴァイブレーションとして会話することができるといわれています。ですから、それは正しいと思います。

（質問者C）えっと、そういううんちくを聞きたいんじゃなくて、実際にネズミが体の上に乗ってきたっていうのだけじゃ信じられないので、そういうのを見せてほしいんですけど。

（尊師）君の心の中には、既に〝真理〟というものに対しての否定的想念というか、そういうものがあって、そしてそれを面白がってるよね。そういう心をまず切らないと、自分自身がそういう見せ物的な立場に置かれる可能性が高いよ。わかるかな、言ってることは。

◉サイエンスは精神科学から降りてきた一部である

（質問者D）こないだね、NHKのテレビだったんですけども、「アインシュタインの宇宙」っていうの見たんですよ。で、詳しい内容はよく覚えてないんですけども、麻原さんの考える宗教と科学――科学っていうのは、化学じゃなくてサイエンスの方なんですけども――宗教と科学の接点についてちょっと聞きたいと思うんですけども、よろしかったら答えてください。

（尊師）まず、アインシュタインが徹底したユダヤ教徒であることは知ってるよね。

（質問者D）はいはい。

（尊師）で、科学というのは、精神科学から降ろされた情報の一部を一生懸命追いかけてるということだとわたしは思うんだよ。つまり、まず先に精神科学があって、その後に実際の科学が存在してくるというか。で、それについてはね、今日、これは阪大で宇宙物理学をやってたマンジュシュリー・ミトラが来てるから、より詳しくちょっと聞いてみようじゃないか。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師）皆さんもね、ご存じのように、いわゆる偉大な科学者とおっしゃる方はね、皆、例えば瞑想の経験とか、あるいは深く思索し続ける経験を持ってるかしています。で、これは、わたしたちがね、オウム真理教の修行においてなされる瞑想その他の修行と同じなんだね。

　で、そのとき、実は宇宙の構造というのがあるわけですけれども、この現象界に対してさらにその上のね、アストラル世界、それからその上にコーザル世界というね、情報の本質のあるところがあるわけですが、そこからの情報をキャッチするわけです。で、それが、例えば啓示であるとか、ひらめきであるとか、あるいは直感であるとかいう形でポッと与えられるわけだね。

　で、後、それをいかにね、具体的に、例えば数学的に記述していくかとか、あるいは観測によってそれをね、証明していくかというのが、どちらかというと技術的な問題になる。だから問題は、要するに、いかに根本的な情報にわたしたちが触れるかということになってくるわけです。で、それをね、直接的に扱っているのが、まあ精神的な科学ということですね。ですから、その成果の一部を利用していくのが物質的な科学ということになると思います。

（尊師）で、そのアインシュタインのね、言葉の中で有名な言葉があるわけだけど、自分は科学の大きな波の一部を経験したにすぎないと。そして、真理の本当に一部を経験したにすぎないという有名な言葉があります。しかし、わたしはそれは事実だと考えています。なぜならば、先程言ったとおり、サイエンスというのは、精神科学から降りてきた一部なんだということだよね。まあ、それについては、これから徐々にオウム真理教の方でもいろんな形で証明をしていきたいと考えています。よろしいでしょうか。

◉科学的な疑問は差異を背景にしている

（質問者E）基本的にはいいんですけど、科学というのは、サイエンスの方は、今精神科学から降りてきたものの一部と今言いましたよね。もうちょっと詳しく説明していただくとうれしいんですけども。何か具体的なことで。よくわからないんですが、はっきりはそのへんが。

（尊師）例えばね、電話があるとしましょうと、ね。そうすると、電話というのは、ここからある場所に対して瞬間的に話をしたいという発想から起きてきてるね、当然。

　ところがそういうのは、例えば、教団内においては日常茶飯事で起きるわけだよね。つまり、テレパシーです。で、例えばそれはどういう形で起きてくるかというと、先程マンジュシュリー・ミトラが言ったように、アストラル――

真理へ』という本を書いています。その中に、共産主義に対してオウム真理教はどのようにとらえてるのかということがしっかりと書かれていますから、それをわたしの方であなたに差し上げますので、それを読んでください。よろしいでしょうか。

（質問者C）ありがとうございます。

●宗教、そしてオウム真理教の目的

（質問者D）オウム真理教の目的は何であるのか、また、キリスト教、仏教、ヒンドゥー、イスラム、ラマ教等々の宗教を否定したところにオウム真理教はあるんでしょうか。

それとですね、宗教とは何であるのか。人がまだ動物というか、獣の域を出ないうちは神や仏といった思考は浮かばなかったはずで、その時代、動物たちの恐れの対象は自然の力でしかなかったわけで、それがいきなり脳の容積が大きくなって思考が深い領域まで入っていくようになったからといってなぜいきなり神仏の登場の必要があったのでしょうか。そのへんをお聞きしたいんですが。

（尊師）まずオウム真理教は、すべての宗教――ま、といっても、一つの流れに属する宗教は肯定しています。で、オウム真理教の目指しているものは何かというと、それらの中に統一性があるはずであると。そして、その統一された部分こそ真理であるというふうに考えてるわけだね。

というよりも、別の見方をするならば、オウム真理教の教えというのは、今から二千五百年前にお説きになった釈迦牟尼の、サキャ神賢の教えこそすべての教義を内在しているというふうに考えてるわけです。で、それを証明しようとしてるわけだね。で、これが、だからオウム真理教の存在であると。

で、じゃあオウム真理教の目的とは何かというと、要するにその教義体系というものは、現実に可能な、わたしたちを人間から神にし、そして――まあ、仏陀というのは実際あるステージであるから、ここではそれを包含する概念として、十の力を有する魂という言葉を使いますけども――この十の力を有する魂へと人々を変革していくことを目的としていますと。

で、次の段階で、なぜ動物から人間へ移行したとき云々ってあるわけだけど、ここで一つ疑問があることは、人間の、例えば大脳イコール、生命体において最高の容積じゃないわけだよね。それはあなたも知ってると思うけども。例えばまあ、クジラの大脳の容積は当然人間よりも大きいわけだし、あるいはサル系統の中にも人間よりも大脳の容積の大きいものはいますと。

で、そこから考えると、大脳の容積の変化によって生じたのではないと。で、これについては魂の落下のプロセスを正確に説き明かした「創世期経」という経典があります。で、その経典を現代的にわかりやすく説き明かした『創世期』（オウム出版）という経典がありますので、それを差し上げますので読んでください。

それによって、魂がどのような形で落下したか、というのはね――笑ってるけど、それ一つ説明するだけで一時間以上かかっちゃうんだよ。だから、それをここで答えちゃうと皆さんに迷惑がかかるでしょ。それで、ね、差し上げますから、それを読んでください。ということだね――そうすることによって、もともとわたしたちは高い世界にいたにかかわらずこうやって落ちてきてるわけであって、で、よって、ふと気づいたときにまた元の、ちょうどそれは先程、ね、質問にあったように酒を飲んだときに自宅に帰るのと同じように、ふと気づいたときに、いや、このままではいけないと。元いた自分の高い世界に帰りたいという、ね、心が生じてそちらの方向に向かうわけだね。いいですか。

（質問者D）ああ、いいですけども、誤解されていた部分があったので、大脳の容積が増えたからといって、神仏が登場したっつうわけじゃなくて、思考がより何ていうかな…。

（尊師）高度になったということでしょ。

（質問者D）ええ、そうですね。そういうことです。

（尊師）うん。

●精神と物質の違いと共通点

（質問者E）精神と肉体っていうか、物質との違いと、共通する点をわかりやすく話していただきたいんで。

（尊師）はい。それは、その話をする前に定義を述べておかなければならないと。それは、大きく世界を分類すると三つに分けることができると。それは、先程も述べた、心だけでできあがっている世界と。それから、例えばあなた方が夢で経験するように、形はあるのだけども触れることができない、あるいは触れたとしても実体のない身体と心によってできあがっている世界と。そして、この世の中のように、粗雑な元素と心と、それから先程述べた幻影の身体と三つを共有している世界。この三つがまず存在します。

そして、まずこの粗雑な世界から説明をするならば、この粗雑な世界を五つのカテゴリーに分類します。それは、第一のカテゴリーが、固体、つまり固形だね。第二のカテゴリーが液体と。第三のカテゴリーが熱元素と。第四のカテゴリーが、そうだね、風、空気――まあ空気といっても気体成分と考えた方がいいだろう――で、第五のカテゴリーが空間と。この五つの要素によって形成されていると。

例えば、人間の肉体を見るならば、骨というものは固体に属するし、例えば血液は二番目の液体のカテゴリーに属

す。

　これはどういうことかというと、例えば、工学部だったら一番わかりやすいコンピュータがここにあるとしましょうと。で、そのコンピュータの、例えば、画面とキーボードの部分とコンピュータの本体と、それからハードディスクの部分があったとしましょうと。で、これを相手に与えただけで、相手はコンピュータを使えるようになるかというと、そうではないと。そこには当然、マニュアルの提供か、あるいはじかにそのコンピュータの使い方を伝授する必要があると。そしてそのどちらかによって、コンピュータの機能を理解した人のみが、コンピュータの恩恵を得ることができると。

　で、同じように、例えば絶対的な状態に至らない者が、絶対的な道を説けるのかという問題があると。つまりそれは、先程のコンピュータの例に戻すならば、コンピュータのユーザーとしての達人、あるいはプログラマーとしての達人、あるいはハードの開発としての達人だったならば、そのパートについては、相手に伝授することはできると。これはどうでしょうか。

（質問者C）どうもありがとうございます。二点目なんですけれども、仏陀釈迦牟尼といわれている存在が、もう二千六百年も昔に解脱されてますよね。で、聖者とかそういうふうにいわれている人は、何千年、何万年も前に解脱されていて、そういう人は少なからずその——キリスト教的に言えば「創造主」とかそういう存在になっているはずだと僕は思うんです。

　それなのに、いまだに人間界とか地獄界とか、そういういろんな世界が実際に存在して、そこに救われない魂がいっぱいいて、それをどうしてそのまま放置しておくのかというか……。絶大な力ですべてを救ってしまったら、もっと簡単に解決するのにと、僕はこう短絡的に、そう感じるわけですが。

（尊師）それは不可能なんだよ。なぜ不可能なのかというと、例えば、あなたが輪廻転生をするとき、つまりあなたが生まれ変わるとき、どのようなプロセスをたどるのかを検討してみたらよくわかる。

　つまり、あなたが来世を決めるときは、あなたの意識によって決定するんです。それはちょうど例えば、ここに一番わかりやすい例を挙げるならば、ラーメン屋さんと、それからそば屋さんと、スパゲッティ屋さんがあったとしましょうと。そして、例えばあなたがラーメンが非常に好きだとするならば、他の人が「そば屋やスパゲッティ屋に行こう」と言っても、そこにいったんは行くかもしれないけれど、またラーメン屋に入るだろうと。で、これが、俗にいうところの、「経験の構成」を背景として輪廻転生を繰り返す、つまり経験の構成とは、あなたの意識の中に、自分はラーメンが好きであるという経験が完全に根づいた状態で、ラーメン屋に入るということの裏づけなんだね。

　で、例えば、地獄へ行く魂、あるいは動物界へ転生する魂、あるいは低級霊域へ転生する魂——わたし自体は、六道すべてを経験しているわけだけれども——その魂の本質的な経験の土台となるものは何かというと、先程述べた、例えば地獄へ至る魂というのは一般的には、自分の仇なす者、つまり自分の敵対する対象が現われて、その対象を殺してしまおうと思って、そこで怒りが生じ、そして、邪悪な心が生じ、それを追いかけてそのまま地獄へ転生するというパターンが普通なんだね。

　ということは、一人一人の心が、完全に成熟し、そういう心の働きそのものが、マイナスであることを理解するではなく、悟る——つまり理解というのは、頭の中でただ単にわかると。しかし悟るとは、それが行動に影響を与え、その自分のけがれた心の働きが、止められるようになったときに、初めて救済は成功するんだよ。

　ということは、わたしたちが自分自身の意識を完全に放棄する状態があるならば、偉大な覚醒者であられる、例えばサキャ神賢や、あるいはその前に登場なさった、カッサパ真理勝者や、あるいは、コーナーガマナ真理勝者や、あるいはカクサンダ真理勝者等々の登場により、もうこのカルパは、偉大な真理勝者が四名出ていらっしゃるから、その真理勝者方によって救済されたはずなんだね。しかしそれができないというのは、わたしたちはわたしたちの意識を、わたしたちだと思っているし、経験をわたしたちだと思ってるし、感覚をわたしたちだと思ってると。あるいはイメージをわたしたちだと思っていると。そしてそのけがれによって、わたしたちはこの、苦しみの愛欲の六つの世界を流転し続けなきゃならないんだ、ということなんだよ。わかるかな、言っていることは。

（質問者C）ああ、わかりました。

（尊師）ということだ。

●未来を開くのは東洋哲学

（質問者D）最近UFOが話題になっていますが、知的生物の文明の発達を突き詰めていくとUFOを作ることはできるのだと僕は思っています。今、地球上で発達しつつある人類は、確かにテクノロジーを進歩をさせてはいますが、光速不変の原理と恒星間旅行が不可能であるという限界も示されています。

　西洋的原理が現代のテクノロジーを発達させてきたのでしょうが、どうにも今ある科学技術そのものが限界にきているように思えます。人類がUFOを開発できるためには、

東洋的原理が必要なのか、このまま西洋的原理の追求が必要なのかを教えて下さい。

（尊師）これは非常に重要な問題だと思います。というのは、あるドイツの研究家が、ヒトラーは亡くなっていないということを一九八〇年代に発表しました。わたしもその内容について大変興味深く読ませていただきました。そして、ドイツの研究――まあわたしもいろいろやっているわけですが――その中で、ヒトラーはチベット仏教と大変深い関係があり、第二次世界大戦の終わりに、ドイツの首都ベルリンでチベット僧約二千人ぐらいが輪になって死んでいたということを読んだことがあります。で、実際問題として、ヒトラーの死体は偽物であったという発表をドイツの一般誌がしています。これは一九九二年にだけどね。で、ヒトラーたちの研究の内容は、UFOの研究もその中の一つであったといわれています。

　とするならば、もともとドイツ人の集中力、それと同時に仏教的な考え方、もちろんこの仏教的な考え方のスタートは、インド・ヨーロッパ語族の宗教、つまり今の中東、あるいは中東の前のエジプト、その前の今存在しているかどうかわからないといわれているムー文明等の流れを汲む教えがあるわけだけれども、その教えの延長線上に、新しい未来を開く考え方、思考パターンが存在しているんだというのがわたしの今の意見です。

（質問者Ｄ）もう少し簡単にお願いしたいんですけど。ちょっと、頭が悪いもんで。

（尊師）いやいや、そんなことは……。つまり、あなたの質問に対して、ズバリ答えるならば、今存在している東洋の哲学があるよね。つまり、西洋哲学、キリスト教を背景とした哲学ではなく、東洋の哲学でなければ、今の枠組みを超えることはできないというのがわたしの考え方です。

（質問者Ｄ）じゃあ、僕は工学部にいるんですけど、これからテクノロジーの開発とかに関わっていくんですけれど、いかがしたらよろしいでしょうか。

（尊師）あの、まあ笑ってるけれども、例えば、マンジュシュリー正悟師、今、質問を受けた彼も、宇宙物理学を大阪大学でなし、そして大学院まで出られた方だし、それから今日は、東京大学の理学部の博士課程を進んでいる弟子もいますし、それから早稲田大学の理工学部の大学院を卒業した彼らも来ていますけれども、まあ彼らはオウム真理教の東洋的な哲学を背景として、例えば素粒子理論等をより発展させたいと考えて、研究とそれから瞑想にふけっているわけです。よろしいでしょうか。

（質問者Ｄ）あの、僕はそんな東工大とか東大とかそんな……、横浜国大ですからそんなに頭良くはないんですけど。

（尊師）いや、それは関係ないと思うね。何をいいたいかというと、それは明らかに大学のコンプレックスであって……。

（質問者Ｄ）じゃなくて普通の、僕たちぐらいのエンジニアが、どうやって技術の開発というかそういうところに、オウム真理教じゃないですけれど、宗教的な面を活かしていったらいいかってことを聞きたいんですけれど。

（尊師）それについては、まず「現象をいかに正しく見るか」ということがポイントになるよね。つまり、何をいいたいかというと、ある実験があったとして、その実験に対しての評価は個々違うでしょ。これはどうかな。例えば、実験結果を正しく自分のものにした人が最も早く最終地点に到達するとわたしは思います。つまり、それは観察に対して正しくその観察をする力、理解する力を身につけることじゃないかな。

　で、そのためのテクニックとして――まあテクニックという言葉は悪いんだけども、要するに、例えば「ザンゲの瞑想」とか、いろいろな心をクリアにする瞑想体系があることは事実です。今日はとにかく、この後皆さんに、特別な呼吸法と瞑想法を伴ったものを伝授しますから、それをまず実践なさったらどうでしょうか。

（質問者Ｄ）はい。

●既存の価値観を転倒させるオウム真理教の教え

（質問者Ｅ）麻原尊師はこのようにして、オウム真理教という宗教団体を主宰しておられますが、日本にはその他にも数知れぬ宗教団体が存在しています。で、それぞれの宗教団体に入っている方々は、それぞれ各々の宗教を真理と信じていらっしゃるんだと思います。このオウム真理教の教えというのは基本的に麻原尊師がみなさんに広めていらっしゃるものだと思うんですが、このような真理をどのようにいったいお知りになったのか、また、他の宗教団体の教え等に関してはどのように考えておられるのか、論理的な説明をしていただけるとありがたいんですが。

（尊師）まず第二の点から話をしたいと思います。第二の点の、他の宗教に対するわたしの考え方は、大きく分けて三つのカテゴリーに分かれます。

　第一番目は、宗教的教えによって現世の利益を得る教えである。第二番目は、宗教的教えによって来世、幸福に至るための教えであると。第三の教えは、来世だけではなく、永遠に、つまり最終的には「不死」を得る教えであると。この三つのカテゴリーに宗教団体の教えというのは分類されるとわたしは考えています。

　で、日本の場合、だいたいこの一のパターンがほとんどではないかと。で、まあキリスト教の場合は、この二番目に属し、そして仏教の場合はこの三番目に属するというのがわたしの考え方です。まず、第二の点についてはよろし

いでしょうか。

(質問者E) はい。

(尊師) それから第一の点については、例えばわたしの場合、三歳ぐらいから俗にいうところの魂の抜け出し——これは幽体離脱とは違うんだけれども——が起きていました。で、これは何を意味するのかというと、要するにこの人間の肉体そのものが絶対的なものではないと。人間の人生そのものは絶対的なものではないという精神的なバックボーンになる準備をしていたということがいえるでしょう。

そして、いろいろな人生の苦しみ——この苦しみというのは二つの点から苦しみがあるわけだけれども、わたしのは一つ前の生というのは、人間の世界ではなく、俗にいわれているところの、神々の世界といわれている天の世界だったわけだけれども、そこに比べると、この人間の世界は寿命も非常に短いし、それから病も多いし、それから、食い物もうまくないし、まあいろいろと喜びがないという意味での苦しみ。これをずっと、経験し続けていたと。で、ある時期、そういう苦しみだけではなく、この人生における一般の人間の苦しみも集中的に現われ、それに対して、どのような解決をするかという点にぶつかったと。

それに対して、まあわたしの採った方法というのは、まず日本の既存の仏教的な教え、あるいは密教的な教えを徹底的に学びました。だから、おそらくほとんどの日本の宗教については、どの宗派、あるいはどの密教についても語ることがわたしはできると思います。で次に、中国・インドの仙道的なもの、ヨーガ的なものを徹底的に究明したと。もちろんこの日本の教えの中には当然、例えば増谷文雄先生の『阿含経典』や、中村元先生の『原始仏典』等も含まれています。

しかし、わたしの中では、どうもそれらのすべての教えに納得がいかなかったというか、これでは最終地点に行けないなという直観が絶えず随従していたと。で、最終的にはチベット仏教、そしてスリランカのテーラヴァーダ仏教に到達し、これは人間界における教えのすべてではないかなということを、そこでわたしは感じとったということだね。

(質問者E) あ、よくわかりました。そこで質問があるんですけれども、先程、麻原尊師は、日本のほとんどの宗教団体は現世利益を追求するものが多いとおっしゃってたんですが、僕も実をいうと来世が存在するということは、個人的には信じていないんです。で、一応、死ぬまでの人生ですね、自分の可能性をできるだけ活かしたいというのがあって、僕自身はお金とか権力とかそういう世俗的な幸福というのをある程度求めたいというのが僕の人生観としてはあるんですが、そういう考えについてはどうお考えでしょうか。

(尊師) あの、まあそれはそれでいいんじゃないだろうか。

(質問者E) あ、そうですか。

(尊師) というのは、例えばだよ、ここに盲目の人がいたとして、その世界の全体が見えない場合、その人は、その盲目の状態なるがゆえに、その人の価値観を決定する。どうかな。例えば、触覚による自分自身の経験等がその人の価値観の基準となると。これは仏典では象のたとえとして表現されているわけだけれども。

盲目の人が例えば五人、象をいじったと。ある人は鼻をいじったと。ある人は足をいじったと。ある人は尾っぽをいじったと。ある人は耳をいじったと。ある人は胴体をいじったと。で、この盲目の人たちは、象に対しての印象をどう言うかというと、ある人は柱のように大きなものであるとか、ある人はホースのようなものであるとか、ある人は平べったいと、まあいろいろ言うだろうと。ね。だからそれ以上の経験をさせない限り、価値観を転倒させることはできないんだね。どうかな。

で、その価値観を転倒させるための実践、それがオウム真理教の教えなんだよ。

(質問者E) あ、なるほど。よくわかりました。

『麻原彰晃の世界』PART20 大阪大学(92年11月2日)より

●予言と解脱の関係

(質問者A) 今の運命学(注・麻原尊師が編み出された「大宇宙占星学」のこと)のビデオ見させていただきまして、いろいろな予言をしておられることがわかりました。あらかじめわかるのであれば、これからもいろんな事件が起こると思うのですが、それらのいっさいに対して、特に大きな事件に対しては、初めから忠告していただければ、今後いっさいそういうことはなくなると思うんですけれども、そういうことはしていただけないのでしょうか。

(尊師) 例えば、『滅亡の日』の中に、ロシアの崩壊が予言されています。これは一九八八年に書いた書籍です。しかし、実際問題としてロシアは崩壊してしまったというのがあります。何を言いたいかというと、個人のポテンシャル、あるいはアビリティ、つまり潜在的な力や具体的な能力では解決できない問題が多々存在します。したがって、わたしはわたしのレベルで、予言については全力で皆さんにお知らせしているわけです。

例えば、例を挙げるならば、「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」というラジオ放送が夜の十時十五分から一四七六キロヘルツでありますが、その中で、土曜日ね、

「ノストラダムス秘密の大予言」を行なっています。これはノストラダムスの予言詩を解説し、わたしのコメントを入れています。こういう形で、皆さんに、これからどういうことが起きますよという、メッセンジャーの役割を果たさせていただいていることは事実です。よろしいでしょうか。

（質問者Ａ）遠い未来じゃなくて、今年もいくつか事件がありましたけれども、例えば電車が突っ込んでしまって。そういう電車をあらかじめ教えていれば、そういう事件はいっさいなくなると思うんですけど。

（尊師）うん。確かにそれはそのとおりです。時間をね、例えば二十四時間すべて予言に充てさせてくれるんだったら、それも可能だと思います。

　つまり、わたしの行なっている活動というものは、多岐にわたっていまして、よってその中の重要な部分だけをみなさんにお知らせする以外に、今のわたしのこの体の状況からみると、不可能であるということがいえると思います。

（質問者Ａ）解脱しても、そうでない人々も、核戦争に巻き込まれて死んでしまったりするんでしたら、それは早い話が、泳ぐ方法を教えているんじゃなくて、溺れて死んでも苦しまない方法を教えているだけに当たるんじゃないですか。

（尊師）うん。賢い質問だと思います。ただし、解脱そのものの意味を知らない質問であると同時に、あなたの今知っているレベルにおいては賢い質問だというふうに訂正させてもらいますが。

　内容としましては、解脱はこの肉体から離脱し、そして自分の来世を経験したり、あるいは自分の行為の結果を経験したりする身体を得るということがいえます。したがって、解脱をした者は、例えば、この肉体が滅びた後、別になんの問題もなく、より高い世界へ転生することができるわけですから、問題ないということがいえるでしょう。

（質問者Ａ）なるほど。ありがとうございました。

●日本から登場するリーダーとは？

（質問者Ｂ）以前にいくつか読んだ予言に関する本の中で、いわゆるハルマゲドンの後に日本から何らかのリーダー的な人物が登場するということが書いてあったんですが、それは本当なんでしょうか。

（尊師）それは本当だと思います。

（質問者Ｂ）その人物のことについては何かわかりますか。

（尊師）大変難しい質問です。というのは、自分のことを自分でそうだとは言えませんから。いいかな。

（質問者Ｂ）はい。ありがとうございました。

●情報に流されない生き方

（質問者Ｃ）さっきのお話の中で、情報に流された生き方と、それを超越した生き方があると言われたんですけれども、予言という情報に振り回されて、例えば水中都市を造るとか、そういうのは構わないんでしょうか。

（尊師）それも大変賢い質問だと思います。今日は大阪大学は非常に賢い質問が多いと思うわけだけれども。

　まず、情報には二つ存在すると。それは自分自身を利益に導く情報と、それから不利益に導く情報と二つ存在すると。で、「情報に流される」ということは、その利益になる情報と不利益になる情報両方を、自分自身がしっかりと選択することなく流された状態を表わすといえます。これはどうでしょうか。

（質問者Ｃ）それはちょっとよくわかりませんが。

（尊師）じゃあ例えば、例を挙げましょう。ここに食べ物があったとして、その食べ物を食べることによって、その人が病気になるとしましょう。例として挙げるならば、最もわかりやすいのは、例えばインドなどに行って日本と同じ感覚で水を飲むと。で、「水がそこにあるから水を飲むもんだ」という、情報における条件的な反応が成立しているとするならば、その人は必ず水を飲みます。そして、インドの水を飲んで、九〇％以上の人は必ずコレラ等の病にかかり、下痢をします。ところが例えば、「インドの水は危険である。よってこのような予防策が必要である」という情報があった場合、当然その情報は、逆に今度は利益を与えることになります。どうでしょうか、これは。

（質問者Ｃ）あ、それはわかります。

（尊師）つまり、情報には、利益を与える情報と不利益を与える情報があるということです。そして、わたしたちがなさなければならないことは、まず情報に流されないで、その情報をまず止めて見、そしてそれが自分にとって利益になるのか不利益になるのかをしっかりと選択するだけの自分自身を持つ必要があるということです。

　そして、それによって考えるならば、例えば未来においていろいろな問題が起きるとするならば、当然、それに対して前もって対処する以外に方法はないじゃないかと。水中都市については、それがいえると思います。

　では、なぜその必要があるのかというと、やはり人類は残らなければならない。それは仏典にも説かれているとおり、わたしたちの寿命はこれから逆転し、八万歳の寿命を得る状態に至っていくわけですから、そのための新しい種、新しい人類を残す必要があります。そのためには当然、それだけの情報の整理および処理と同時に、その情報をもとにして新しい未来を創りあげる努力をする必要があるんじゃないでしょうか。よろしいでしょうか。

(質問者C) つまり、情報に流されないと言っても、それは情報を判断すればいいってことですね。
(尊師) いや、だから流されるというのは、要するに情報が主体であると。情報を使うということと情報に流されるというのは別の問題だと思うけど、どうでしょうかそれは。
(質問者C) 正しい判断をするというのはやっぱり情報を判断しているわけですよね。
(尊師) だからそのときには、情報に流されてはいないよね。例えば人に流されるという言葉を定義した場合、その人のいいなりになるということだね。
(質問者C) そうです。だから、流されないというのがつまり、超越するわけではなく、正しく判断するという意味なんですね、と。
(尊師) いや、正しく判断するという意味と同時に、段階があるわけだけど、もう一つは、完全に情報をシャットアウトしてしまうという道もあります。
(質問者C) だから最初、そうかなと思ったんですけれども。
(尊師) だからそれは段階的に考えていただいたら結構だと思います。それについては。
(質問者C) どういう段階ですか。
(尊師) つまり、完全に情報からのシャットアウトというのは、最終的な段階ですから、つまり解脱の段階ですから、そういう生き方を求める場合はそれは最高だと思います。それはそれで。
　しかし、そうではなくて、例えばちょっと専門的な言葉になりますが、マハーヤーナ、つまりもし大乗的な生き方を志すとするならば、情報をいったん止めて、正しく判断し、必要な情報は必要な情報として整理し処理する必要があるということです。よろしいでしょうか。
(質問者C) はい。

●科学的に証明されない宗教は偽物

(質問者D) 宗教と科学とは対立する概念なんでしょうか。
(尊師) いや、結論からいうと、真実の宗教は科学的証明がある段階まではできるというのが、わたしの科学と宗教に対する考え方です。逆の言い方をするならば、科学的に証明されない宗教は偽物であるというのがわたしの立場です。
　例えば例を挙げましょう。瞑想ステージにおいて、例えば「阿羅漢」という境地があると。この阿羅漢という境地はどのような状態かというと、これは、ここに今来ているS師、あるいはマンジュシュリー正悟師、あるいはT君等の実験結果でもわかるとおり、シータ波優位の脳波の状態になると。例えばクンダリニー・ヨーガの状態になると、これはシータ波よりアルファ波優位の状態になると。それから一般の人はベータ波優位の脳波の状態になる等の実験結果でもわかるとおり、はっきりと修行ステージというものは、科学的に測定することが可能であると。
　例えば、第四ステージの場合、呼吸の停止が当然存在しますし、あるいは心臓の停止、あるいは心臓のコントロール等の現象、これが完全に存在します。したがって、科学的に宗教の最高の部分のあるポイントを証明することは可能であると考えています。よろしいでしょうか。

●最高の世界とは何か?

(質問者E) どの宗教でも世界の破滅の後に永遠の世界を築くようなことを説いていますが、永遠の世界がどうして素晴らしい世界と言い切れるのでしょうか。その価値基準はどこに置かれているんでしょうか。
(尊師) これは大変重要な問題だと思います。人間のもともと欲求している本質は、絶対的な自由・幸福・歓喜の三つです。そして、人間は望もうと望むまいと、決して魂の断滅を経験することはできません。つまり、これはどういうことかというと、わたしたちは本質的に「無」になることは不可能なわけです。したがって、永遠の生命、永遠の世界において、自分自身の魂の本質を理解し、あるいはカルマの法則を理解し、正しく生き、幸福が体現できるとするならば、その世界は最高ということになるんじゃないでしょうか。

●社会主義失敗の真因

(質問者F) 社会主義はなぜ成功しなかったのでしょうか。
(尊師) もともと社会主義の思想そのものは資本主義よりも優れた点があるとわたしは考えています。しかし、人間を磨き上げる技術がなかったがゆえに、トップに立つ人たちが結局、権力の独占や物質の独占を行なったと。それゆえに、結論からいうと、社会主義のもともと目指している理念である、物質的に平等というものが達成できなかった、ということではないでしょうか。

●死を超えた生き方を――オウム真理教の命題

(質問者C) オウム真理教の与える宗教的な命題を簡単に説明してください。
(尊師) オウム真理教の与える宗教的命題とは、人は必ず死ぬものであると。そして、その死に対してどのような生き方をすれば、最もベストな人生であろうかと。特にここでポイントになってくるのは、死から次の生に至るまでの期間と、それから今の人生とを比較した場合、当然、高い世界に至るならば、次の世界の方が長いわけであると。と

するならば、今、何に集中し、何を目的として生きたら最もいいのかということ、これを解き明かしたのが、オウム真理教の教えであると思います。

『麻原彰晃の世界』PART20
千葉大学（92年11月3日）

●カルマの下に平等――生きるも死ぬもカルマ次第

（質問者A）先程、都市人口が十分の一になってしまうと言われましたけれども、もし仏様のそばで皆が平等ならば、その人たちすべてを救う方法があるのではないのですか？

（尊師）質問してよろしいでしょうか。人間は必ず死ななければならない。どうでしょうか、これは。

（質問者A）ええ、わかります。

（尊師）で、じゃあ今までだれが、その永遠の生命を与えたでしょうか。

（質問者A）わたしは、仏様かなと思うんですけれども……。

（尊師）確かに、仏陀釈迦牟尼、あるいは仏陀釈迦牟尼以前の真理勝者方である、例えばカッサパ真理勝者だとか、コーナーガマナ真理勝者だとか、あるいはカクサンダ真理勝者だとか、ヴィパッシー真理勝者だとか、多くの真理勝者が出られました。で、確かにあなたのおっしゃるとおり、永遠の生命をその信奉者たちにはお与えになりました。しかし、その与えられた生命というのは、この肉体の生命ではありません。それはどうかな？

（質問者A）わかります。魂です。

（尊師）ですね。それと同じです。つまり、わたしたちはカルマにおいて平等なんです。カルマにおいて平等とは、善行や徳の修行を行なう者はその見返りを受けますし、逆に悪業をなす者は、やはりその報いを受けなきゃならないと。

　で、その都市の人口が十分の九になるか、あるいは十分の八になるか、あるいは十分の七になるか、あるいは逆に二十分の十九になるか、これはそこに住んでいらっしゃる方々の個人個人のカルマに最終的には依存すると考えていいんじゃないでしょうか。

（質問者A）わかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

●第三次大戦は人類に利益をもたらす？

（質問者B）戦争とは、善なのでしょうか悪なのでしょうか。

（尊師）戦争が善であるか悪であるかは、目的によって違うということができるでしょう。

（質問者B）目的というと、どういう目的の場合が善にみなされ、どういう目的が悪にみなされるんでしょうか。

（尊師）それは非常に難しい問題だね。なぜ難しい問題であるかというと、その人が、どのようなステージ、つまり精神的な段階にあるかによって違ってくるということがいえます。

（質問者B）戦争というのは個人の問題じゃなくて、最終的には国家間とか集団的な問題になってくるので、そういう人の意識とかでは決められない部分というのが出てくると思うんですけれど。オウム真理教の教えとして、戦争というものを肯定するのか否定するのかというところだと……。

（尊師）それは、ケースバイケースではないかと思います。例えば、これから世紀末に突っ込んで、いろいろな現象が起きるわけですが、ある部分については否定しなきゃならないし、ある部分については肯定しなければならないと考えます。

（質問者B）肯定する部分というのはどういう場合になるのかが、聞いてみたいです。

（尊師）そうだね、もし例えばだよ、人々がその死というものを契機として、死に対して新しい認識が生じ、それによって正しい生き方をするとするならば、それはそれで肯定できる材料じゃないかと思います。

　つまり、人間は必ず生まれ変わりをしなければならないと。輪廻転生を繰り返さなければならないと。その場合これはわたしの人生観でもあるわけだけど、いろんな苦しみが生じると。その苦しみが、もしその人の次の利益に、大きな利益として跳ね返るとするならば、その苦しみというのは利益であると見ていいんじゃないかな。

　だから例えば、戦争のあるパートにおいて、それによって人々の心が入れ替わり――まあ仏典ではそうなっているわけだけどね。つまり、今回の戦争の後どうなるかというと、人々は「さあ皆さんで戒律を守ろう」ということから寿命が延び、そして人々の容色が良くなり、それから幸福の度合いが増してくるというふうにうたわれています。これは『聖書』においてもそうです。ですから、今回行なわれる戦争が、もしそのような戦争であるとするならば、それはそれで衆生に対する利益を与えることになるんじゃないでしょうか。

　しかし、それが単に、要するに国家間の土地の拡大だとか、つまり領土の拡大だとか、あるいは財物の拡大だとか、あるいは逆に軍事産業を発展させるための戦争であるだとかいう状態であるとするならば、それは悲惨な状態であるとわたしは考えます。

（質問者B）あ、はい、わかりました。

◉宗教の選び方——何を望むかによって

（質問者C）今、宗教がいっぱいあって、統一教会とか真光教とか何かたくさんありすぎて、普通の人たちにはどれも正しいというふうに聞こえるんですけれど、それを判断するということができないので、何をもってそれを判断すればいいかということを教えてください。

（尊師）宗教の目的は、三段階に分かれます。それは第一は現世利益を説く宗教。つまり、その宗教を実践することによって、病気が治ったり、現実的に経済的に豊かになったり、あるいは素敵な恋人と結婚する、といったようなものをポイントとして成立した宗教が一つです。

それから第二段階の宗教は、これよりも若干高次元で、その宗教の教えを実践するならば、その人が来世、今よりも高い世界へ生まれ変わるという教えです。これは例えば、キリスト教、あるいはイスラム教等が、このカテゴリーに当たると考えてください。

それから、もう一段階高い教えは、それらのすべての現象を超越し、「不死」に至る。不死に至るとは、これはパーリ語では「アッタ」、サンスクリット語では「アートマン」といわれている、わたしたちの真我に到達する道を説き明かす教えです。これは仏教や、あるいはヨーガ派がこれに属するということができるでしょう。

したがって、あなたが何を望むかによって、その真実という意味合いが変わってきます。よろしいでしょうか。つまり、もしあなたがただ単に、素敵な恋人を得たい、あるいは豊かな人生を歩きたい等をお考えになるならば、第一のカテゴリーに属する宗教を選んでも問題はないと。選んでも問題ないというのは、それだけ近視眼的なものの見方しかできないからです。

そうではなくて、少なくとも来世は幸福になりたいんだと考えるならば、第二の宗教、第二のカテゴリーに属する宗教を選ぶべきでしょう。これは先程の近視眼的な見方より、若干正常なタイムスパンにのっとった考え方であるということができるでしょう。

もしあなたが、永遠の幸福・歓喜・自由を求めたいと考えるならば、第三のカテゴリーに属する宗教を選ぶべきだと思います。よろしいでしょうか。

◉二つ存在する仏教の「空」

（質問者D）麻原尊師は仏教の「空」についてどう考えていますか。

（尊師）仏教の空については、二つの見解が経典に示されていますし、わたしの経験からいっても二つの空が存在すると考えられます。

これは瞑想ステージにおいて、形状界から抜け出し非形状界に入ったときの空、つまり空間無辺境、識別無辺境、それから無所有境、非認知非非認知境、と呼ばれる空の状態と。

それから大乗の修行者が到達する、すべての現象においては実体がない、つまりすべては心の働きと現象の結びつきであるということを基点としての空ですね。つまり、現象を完全に捨断したときに、実体と心との本質が切り離された空。つまり、解脱や悟りによって到達する空の二つがあると考えます。よろしいでしょうか。

（質問者D）はい、どうもありがとうございました。

◉安楽死した人はどう生まれ変わるか

（質問者E）人間は、死んだらどうなるんですか。

（尊師）この問題は、そんなに大した問題ではありません。

（質問者E）あ、そうなんですか。

（尊師）はい。まず、どのパターンから説明したらいいかな。

（質問者E）こう普通に、安楽死したら……。

（尊師）安楽死のパターンがいいかな。

（質問者E）ええ。

（尊師）じゃあ、安楽死のパターンを例に採りましょう。まず、安楽死のパターンの場合、必ず大量の薬物等が使われます。そうするとその薬物の働きによって、神経系だけではなく、脳細胞の働きが非常に鈍くなると。この状態は仏教的な言葉を使うならば、形状界が混沌とした状態、これは白い雪のような粒々の状態が現われ、現象に対する認識する力が欠如します。

次に、コーザルの働きにおいては、光が鈍くなり、闇の状態が訪れます。そしてエネルギーのセンター、まあムーラダーラ、スヴァディスターナ、マニプーラ、アナハタ、ヴィシュッダ、それからアージュニァー、サハスラーラという、七つのチァクラがあるわけですが、この中のスヴァディスターナ・チァクラ、つまり動物界へ至るためのチァクラにエネルギーが集中します。

次に、その安楽死をなす者の前に、緑のバルドーが立ち現われてきます。このバルドーは、その人にとっては、ある程度光り輝いているように見えますが、正確な観察眼をもって見る場合、どんよりした緑です。そして、その緑のバルドーに対する、大変なる愛着が生じます。そこで、いろいろな安らぎのヴィジョンや、あるいは動物的ないろいろなヴィジョンが現われ、それに吸い込まれるように、つまり意識がそこに完全にとらわれ引っかかる形で、洞窟のようなものの中を抜け出します。

次に、その洞窟のようなものの中を抜け出した後に、下に一般的に岩場のような情景が現われてきます。この岩場

のような情景には、いろいろな動物たちがうごめいているようなヴィジョンが見えてきます。例えば蛇だとか、いろいろな哺乳類だとか、いろいろな動物が見えます。そこで非常に恐怖を覚えます。そしてそこで、卵生に生まれ変わるか、あるいは胎生に生まれ変わるかの選択が生じます。そして、完全に子宮に宿ったならば、もうそこから抜け出すことはできません。これが安楽死の輪廻転生のパターンです。よろしいでしょうか。

（質問者E）で、そのときに自分の人格というのはどうなるんですか。

（尊師）つまり、あなたの例えば表層意識の人格かな。

（質問者E）そうです。

（尊師）表層意識の人格は消えますが、あなたの潜在意識——例えば、よく精神を分裂した人が別の人格を現わすけれども、そのようなもう一つ別の、よりヴィヴィッドな、つまりはっきりした人格が現われます。そして、その人格が主導権を握る形で輪廻転生を行なうわけです。

（質問者E）じゃあ次の自分というのは、今の自分とは全然別なものになるんですか。

（尊師）しかし、過去の自分を、その中間状態まではははっきり覚えています。つまり、子宮に宿るまで、あるいは卵の状態になるまでは、はっきりとした認識がそこに存在します。

（質問者E）でも、生まれ変わってしまえば、今の自分とは全然関係がなくなってしまうということですか。

（尊師）関係がなくなるというよりも、一時的な気絶状態が生じるのは事実だね。

（質問者E）意識の下ってことですか。

（尊師）今あなたの表層意識が、いったん遮断されることは事実です。

（質問者E）で、今の自分というのは、生まれ変わってその後は、もう全然出てこなくなっちゃうんですか。

（尊師）そうではないです。これは、例えば修行とか始めると、過去の意識状態が甦ります。つまり、眠っている状態ということができます。

（質問者E）どうもありがとうございました。

◉「死」は克服すべき対象

（質問者F）あの、先程「死んだらどうなるか」という質問があって、それはちょっとわかったんですけれども、今自分が生きているうちに死というものをどういうふうに認識すべきなのかということをお聞かせください。

（尊師）死の軍勢というものは、わたしたちが克服しなければならない最高の敵であるというのが、仏教あるいはヨーガ、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教等でいわれる考え方です。では、それに対してどのように認識したらいいのかというと、要するに死というものは、学校の変わり目という考え方でいいんじゃないかということができます。

例えば、中学校で一生懸命努力した人は、高校は当然いい高校に行けるだろうと。しかし、いい高校に入ったとしても、その人が高校でもし努力をしなければ、大学は悲惨な状態であると。逆に、もし高校で努力をするならば、いい大学へ入ることができると。しかし、次に今度は大学で遊んでしまったら、社会に出てから苦しまなきゃならないと。

つまり、今この人間としての生を受けた以上、その人間としての生で、人生において精いっぱい自分のできる善行や、徳の修行や、あるいは心を浄化するような修行を行なうことができるならば、その大いなる力によって、次の生は、ちょうど目的の大学へ通ることができるように、目的の輪廻転生ができると考えていいと思います。

したがって死は、恐れるべきものではなく、克服すべき対象であると考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者F）それでは、自殺とか、そういう人は、次に生まれ変わるときは不幸になるということですか。

（尊師）そうだね、一般的にオウム真理教では、もったいないという考え方を持ちます。なぜならば、人間としての人生がまだ残っていると。その場合、その残っている人生を自分なりに全力で努力すれば、よりいい結果が出るのに、そこで努力を断念してしまった場合どうなるのかと。今までの自分自身の心の働きによって輪廻転生を繰り返すわけですから、もったいないよね。わかるかな。

（質問者F）はい。

（尊師）ということだね。

（質問者F）それじゃ、今の人生で努力するということは、今日本で決められている〝右側を歩く〟とか、そういう何か法律に従うということですか。

（尊師）ではないよね。これは、過去の偉大な聖者の教え、あるいは現代の聖者の教えを一生懸命実践する、ということではないだろうか。

（質問者F）はい。わかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

『麻原彰晃の世界』PART20
京都大学（92年11月23日）

◉本物の宗教は科学で証明できる

（質問者A）科学と宗教の関係についてお教えいただきたいんですけれど。

（尊師）はい。科学は、例えばアインシュタインの相対性理論にしろそうですが、彼の宗教観から出た物理学理論であるということができます。それは例えば、絶対主である創造主を規定し、その創造主の存在がこうであるがゆえにこのような法則が成立するはずであるという理論、それが相対性理論であるとわたしは考えています。

で、実際問題として、科学と宗教との一般的な関係はどうかというと、科学で証明のできる宗教は、その段階においては本物であるということができると思います。例えば、例を挙げるならば仏教の場合、第四の静慮、つまり第四の瞑想ステージへ到達すると呼吸が停止するとか、あるいは心臓が停止するとか、あるいは外的な刺激に対して影響を受けなくなるとか、まあいろいろとありますが、そのようなことが実際に客観的に達成されて初めてそのステージに到達したんだということができるわけです。

もちろん、それを神秘的なグルの力によって、その弟子がそこへ到達したかどうかをはかりしることは当然できますが、それを一般の人に納得させるためには、方便として科学を使うことは大変有効ではないかと考えております。よろしいでしょうか。

●永久に続く解脱の喜び

（質問者B）解脱というのは、いったいどういう状態なのでしょうか。「歓喜」というふうに言われますけれど、通常の歓喜とは何か違いがあるはずだと思うんですけれど、どのような変化があるんでしょうか。

（尊師）まず解脱というのは、わたしたちの肉体と関係がある部分、それからアストラルと関係がある部分等を含めまして、「十のきずな」があります。で、その十のきずなとは何かというと、まずこの肉体を我であると思う心の働き。それから次は、この現実の生活の喜びこそすべてであると考える心の働き。次は、例えば宗教は存在するんだが、それはあくまでもその現実的な喜びを得るためのものであると考える心の働き。それから性的な興奮。それから他人を蹴落とそうとする害心。これがまず「低位に属する五つのきずな」と呼ばれるものです。

これは仏教的な用語を使うならば「有身見」、「疑念」、「戒禁のとらわれ」、「愛欲の興奮」、「害心」という五つのきずながあります。これは実際問題、あるステージに到達すると、エネルギーの帯というか棒というかね、そういう形で感じることができます。

で、この五つのきずなが完全にシャットアウトされる、つまりそのエネルギーがどこにいても感じられなくなる、あるいは到達しなくなる状態。次にもう一段階高い状態で、要するに視覚的な、あるいは五感における美しいものに対するとらわれが捨断された状態。次は、美しい心に対しての影響を受けなくなった状態。次は、喜びにおける興奮が完全に止まった状態。次は、自分の達成に対する満足が完全に止まった状態。次は、自分が偉大な経験をしたとして、その経験に対しても全くとらわれなくなったような状態。これは、「形状のとらわれ」、「非形状のとらわれ」、それから「興奮」、それから「慢」、それから「非神秘力」というこの五つ――これは内的な五つですが、これも同じようにエネルギーの帯として感じることができますが、綱として感じることができますが――これが完全にシャットアウトされます。

シャットアウトされるとどうなるかというと、そこに存在していた喜びの元が上昇します。喜びの元が上昇することによって、その喜びの元は体全体を覆います。そしてその体全体を覆った喜びの元は、上昇し頭頂までいくと次は下降する、下降すると上昇するを連続的に繰り返すようになります。これは、自然にそれが起きるようになります。

ということは何かというと、つまりそのエネルギーが全く減らない状態で永久循環を繰り返す形になるわけです。この状態が解脱における喜びであると考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者B）はい。

●予言の未来を超越する"内なる喜び"

（質問者C）"内なる喜び"などの話と予言の話との関連性がないように思えたのですが、関連性があるんでしょうか。

（尊師）これから起きるいろいろな変化、予言があるとしましょうと。で、これはあくまでも外的な世界の話であると。よろしいでしょうか。ところがもし、例えばあなたが内なる喜びに到達するならば、いかなる現象が起きたとしてもそれに影響されることなく生き続けることができる、あるいは影響されることなく高い転生を行なうことができるという意味において、内なる喜びの話をしているのです。

で、これは最も理想的な魂のパターンであると考えていただいて結構だと思います。つまり外的な変化に対して全く影響を受けず、自分自身が最終的な確定をなすとするならば、それは最高であるからです。よろしいでしょうか。

（質問者C）はい。ありがとうございました。

●戦慄の近未来――軍事政権の樹立は間近

（質問者D）来年のことを聞きたいんですけれども、来年は異常気象とか天災とか起こるんでしょうか。それから、政治改革は本当に進むんでしょうか。

（尊師）皆さんは東京大学の医学部の助教授が逮捕された件は知っていますか。

（質問者C）あ、知ってます。